

## 6) イチジク = 英日果 / 無花果

イチジクはクワ科の落葉小高木で、原産地はアラビア半島南部から小アジアを中心に、地中海沿岸から西はカナリア諸島、東はシリア付近まで分布する。高さ3~5m、葉は3~7裂する掌状で互生し、初夏、葉柄基部に肉厚の花囊をつけ、この中に無数の白色花を咲かせる。雌雄異株であるものの、栽培品には雄株は見られず、受精することなく果実は成長し食用となる。果実に見えるものは多数の子房が集まったもので、これが肥大して一つの果実に見える。また枝や葉を傷つけると乳白色の液を分泌する。果実は7月頃と9月頃に熟し、それぞれ夏果、秋果という。学名は『*Ficus carica*』で、属名はイチジクのラテン古名に由来し、種小辞は「直立した」の意。イギリスでは『common fig』、中国名は『無花果』である。和名の起こりはペルシャ語でイチジクを意味する『anjir』を、漢名では『映日果』(インジエクオ)と呼び、これが訛って日本語ではイチジクと呼ばれるようになったという。他にも一月で熟するために『一熟』とか、いち早く熟するためなどとの諸説もあるが、いささか理に走りすぎではないだろうか。別称としては唐柿(トウガキ)、ホウライガキなどで、『書言字考節用集』(ショゲンジコウセツヨウシュウ)には「無花果、一名映日果」と記されている。ペルシャのアンジールは、中国ではインジエクオとなり、日本ではイチジクになったわけだが、このように呼称や言語が伝播する過程で、発音や呼び方が変化する例は極めて多い。もともとが外国のものだから当然のこととはいえ、ここに植物名以外のそんな例をいくつか挙げてみることにしよう。しかしその前に一つだけお断りしておきたいことがある。それは現代日本語の『人=hito』は古代語では[pito]と発音されていたという点である。このことは何を意味するかというと、現代人の『ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ』の発音を、古代人は『パ・ピ・プ・ペ・ポ』と発音していたと推測される点である。さらに付け加えれば、『サ・シ・ス・セ・ソ』と『タ・チ・ツ・テ・ト』が混同されていた(03-04-08-8)。また現在でもザ行とダ行が混同されている地域が、紀州や大分などいくつかある。ところでもう随分前に流行った「ドント、ぼちい」というテレビのCMは、この理にかなったもので、現代語にすれば「ドント、欲しい」という意味である。因にドントは化学変化を利用して温熱を出すカイロの名前で、CMには数人の縄文人が登場し、焚火を囲みながら寒さに震えて、口々に「ドントぼちい」と言っていたのである。さて話を戻すとして、この[pito]は韓国語の祖語形では[pat]であった。この[pat]からは[pari][piri]などの変化形も生じたが、このパリは日本語でも成人男性を意味する『ジョッパリ』などという言葉として残っている。そして広く世界に目をやると、この語根は『people』につながっているようにも見えて来る。さらに韓国語では一人称複数形を[mani]と発音し、蒙古語では[man]と発音する。これはまさに英語の『man』と同一であり、日本語では単複の違いこそあれ、古語において『マロ』として残っている。つまり『古事記』の著者は『太安万侶』(オオノヤスマロ)であり、平安時代の『征夷大將軍』

は『坂上田村麿』(サカノエノタムラマロ)であった。さらに『鳥居』は、おそらく日本人が作った最も古い木造建築物の一つだろうが、韓国語では『木』を意味する語根は [tə ɭ] で、門のことを [tol]、橋は [tari] で、どれも木で作ったところから、木という意味の語根が残っている。そしてこれらの言葉は英語の木を意味する『tree』の語幹とも一致している。これだけではない。日本語の『田』を意味する語は、蒙古語では [tariyalan] で、古代韓国語では [tal] である。これはフランス語では「大地」や「土地」を意味する『terrain』に通じている。さらに例を上げると『切る』という動詞は、英語では『cut』であるが、韓国語で削るという意味の言葉は [kakta] であるという。これは日本語の『刀』や『刈る』『鎌』などの言葉とも関連性がありそうだ。そして中国では道路は『路=ru』だが、フランス語でも『rue』であり、英語でも『root』であり、アイヌ語でも [rú] である。また中国語では父、母のことを『パーパ』『マーマ』というが、これはインド・ヨーロッパ語の父は、『F』または『P』で始まり、母が『M』で始まることを考えれば、極めて近似していると言わざるをえない。おそらく世界の言語は多発的なものではなく、どこか一つのエリア、例えばカスピ海の周辺あたりで発生したものが、何千年の歳月を経て、世界の国々へ伝播し、その過程で少しずつ変化していったのだろう。何の根拠もない想像ではあるが、このあたりが言語を持った人類が発祥した最初の地であったのかも知れない。聖書の創世記には『バベルの塔』の記述があり、言語を持った人々が世界へ四散したことを暗示している。

さてここでもう一つ面白い例を挙げてみよう。たびたび登場する『日本書紀』に現れた『死体化生神話』である。これをもう一度なぞってみると、まず頭から『馬』が、額から『粟』が、目から『稗』が、眉から『蚕』が、腹から『稻』が、陰部から『麦・大豆・小豆』が、出たことになっている。この部位と作物とを日本語及び韓国語で照らし合わせてみると、以下のような表ができる。

| 日本語での部位 | 韓国語の発音        | 日本語での産物 | 韓国語の発音                   |
|---------|---------------|---------|--------------------------|
| 頭       | [tou][atama]  | 馬       | [uma][ma] [nmar]         |
| 額       | [gaku][hitai] | 粟       | [awa][shoku][zoku] [cho] |
| 目       | [me][hitomi]  | 稗       | [hie][hai] [nui']        |
| 眉       | [bi][mayu]    | 蚕       | [kaiko][san] [kəsi']     |
| 腹       | [hara][huku]  | 稻       | [ine][tou] [pyö]         |
| 陰部      | [hoto]        | 麦       | [mugi][baku] [pori]      |
|         |               | 大豆      | [daizu] [pit]            |
|         |               | 小豆      | [shouzu][azuki] [pat]    |

こうして並べてみると、相互の関連性を安易に否定することができなくなってしまう。少なくともなんらかの関連性をもって成立されたものと思われてくる。そしてこうした『死体化生神話』や、今まで見てきた『羽衣伝説』『人魚伝説』などは、少し

ずつ形を変えながらも、世界の各地にその類型を見ることができる。これをそれぞれのエリアで偶然似通ったものが発生したと見ることはたやすい。しかし『羽衣伝説』や『人魚伝説』が世界中で見られ、『因幡の素兔伝説』などの根源がニューギニアやサモアあたりであって、現実に日本人の祖先が、南のほうから黒潮に乗って渡って来たものと考えれば、この人たちと共に伝説や文化も、一緒にもたらされたと考える方がむしろ違和感がない。恐らく言語が伝播したように、伝説もまた形を少しずつ変えながら、あちこちへ流れていったのだろう。翻って日本と朝鮮半島の関係に思いを馳せるとき、両者の間にはこのような往来が幾千年ものあいだ続いていた。そのことはあちこちから出土する遺物を見ても、明らかである。

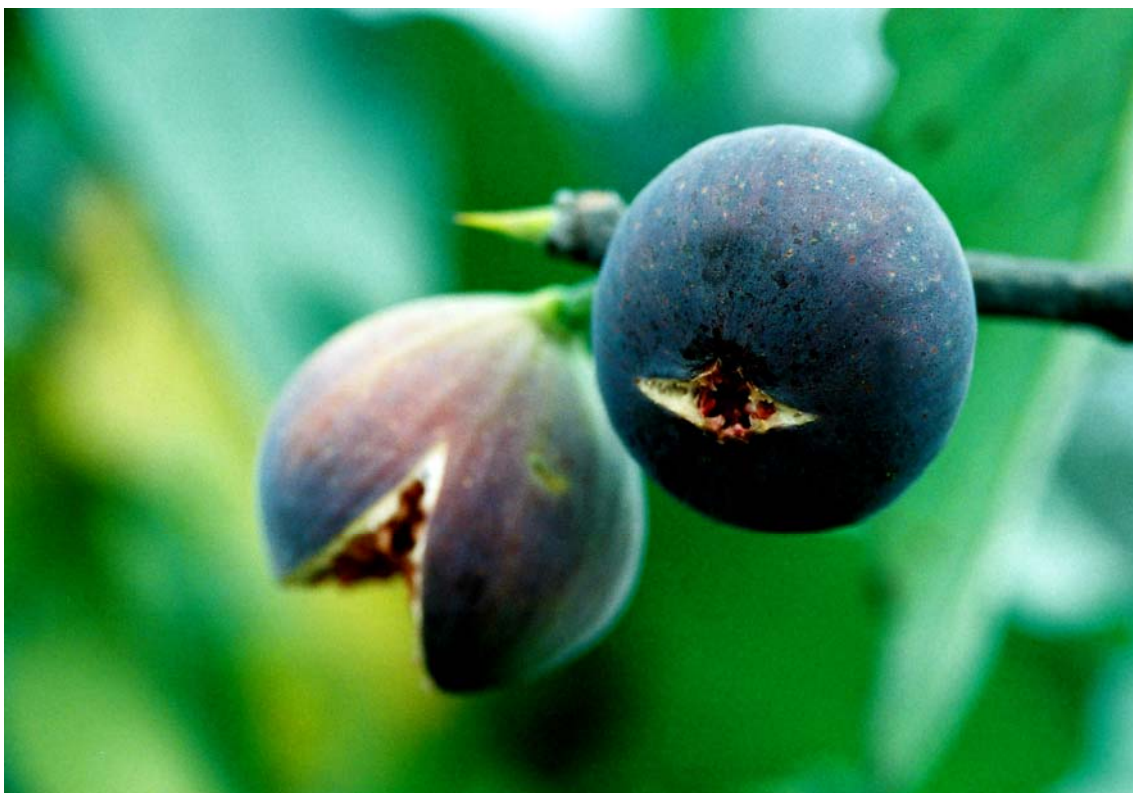
さて本論のイチジクに話を戻すことにしよう。イチジクの栽培の歴史は古く、紀元前3000年頃のシュメール王朝の時代頃からと思われ、エジプトでは第12王朝時代の刻画には葡萄とともに描かれている。紀元前2000年初期になるとアッシリア人の間でも栽培され、小アジアから次第に地中海沿岸地方に広がっていった。ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』などにもしばしば登場し、特に『聖書』にはイチジクの名は随所に見られる。『旧約聖書』の「創世記」に見えるアダムとイブが食べた禁断の木の実は、本当はイチジクではなかったかという説もある。というのはパレスチナ周辺にはもともとリンゴはなく、キリスト教がヨーロッパ北部へ広がって行く過程で、イチジクから地元の産物であるリンゴに、置き替わったものと思われるからである。それはさておき、楽園を追われた二人は裸であることに気づいて、急に羞恥心を抱き、イチジクの葉をつづって腰に巻いたと『旧約聖書』には記されている。このようにイチジクはその実が有用であったがために、古い伝説とも結びついて、多くの記録に残されている。ローマの始祖、ロムルとレムスの揺り籠もローマに流れ着いて、このイチジクの根っこに引っかかって止まったとされている。ローマ人にとってこの木は、それほど由緒ある木と解釈することができるだろう。しかしエジプト人にとってイチジクはミイラの棺桶を作る木でもあった。しかしこれは砂漠の国では、他に入手しやすく良質な木材が見つからなかったためであろう。

イチジクが中国に渡ったのは唐代になってからのことで、日本に伝わったのは寛永年間(1624~1644年)のこととされ、ポルトガル人によるものである。当事は『蓬萊柿』(ホウライシ)といわれ、『大和本草』には次のように記されている。

無花果(イチジク<注>タウカキ)寛永年中西南洋の種を得て、長崎にうう。今諸国に之有り。葉は桐に似たり。花なくして実あり。異物なり。実は龍眼の大きにて殻なし。皆肉なり。味甘し。食すること可なり。

イチジクの特徴が簡潔に記され、漢方では葉を乾燥させたものを、『無花果葉』と呼び、刻んで布袋につめ浴湯料にすると神経痛、イボなどによく、乾燥した果実は『無花果』といい緩下に用いる。また木を傷つけたときに生ずる乳汁はイボやウオノメに良いという。





熟してきたイチジクの果実。口をあけたような表情で愛嬌がある。初秋から初冬まで少しずつ収穫してゆくことが出来るのもメリットである(埼玉県川島町)。



イチジクの果実(埼玉県川島町)

[目次に戻る](#)